Abstract

京城帝国大学の学生文芸と在朝日本人文学

尹 大 石
✉ yds70@snu.ac.kr

The purpose of this thesis is to clarify an element of student literature in Keijo Imperial University, the origin of Japanese colonial literature. Japanese colonial literature refers to the literature of the Japanese who lived in colonial Joseon. It flourished in the first half of the 1940's when Korean and Japanese writers came together. The Japanese writers were simultaneously distinct from those in their homeland from the perspective of literary direction and from local writers in occupied Korea. At Keijo Imperial University, students had two magazines in which they could publish literary works. In a preparatory course they published *Seiryo* and in a regular course they published *Jodai Bungaku*. This thesis focuses on Issiki, who participated actively in both magazines. In *Seiryo*, he insisted on realism literature and for that reason he criticized imperial Japan and showed a sense of solidarity with the Korean writer, Chang Hyukju, who played an active part in Tokyo literary circles. He published an inter-textual literary poem which was inspired by Chang's novel.

Keywords Issiki Takesi(一色豪), Student's Literature(学生文芸), Keijo Imperial University(京城帝国大学), Japanese colonial literature in Joseon(在朝日本人文学)

1. 地方文学から「新」地方文学へ

1939年10月の朝鮮文人協会の立ち上げと、1941年11月の『国民文学』創刊によって、「内鮮一体」という旗印の下に、朝鮮文人と在朝日本人文人は「朝鮮文学」もしくは「半島文学」の範疇に一括されている。それまでの朝鮮人による朝鮮文学は朝鮮語によるもので、日本文学やその他の国家あるいはその言語の名称を掲げた民族文学と肩を並べるものであり、その上位概念としては世界文学だけが存在するという固有な文学を意味していた。一方、在朝日本人による「半島文学」は、日本語によって書かれた日本文学の一地方文学でありながら、同時に植民地という点で他の地方とはいささか性格の異なる植民地文学でもあった。互いに共有するものは地域だけというこの二つの文学が、1930年代末にひとつの範疇に括られることによって「朝鮮文学」は新たに定義する必要に迫られたのである。「国民文学」の一環としての「朝鮮文学」がそれに当たるが、その際「国民文学」の性格や「国民文学」と「朝鮮文学」の関係は、朝鮮人と日本人にとってそれぞれ異なっていた。

朝鮮文人にとって「国民文学」とは何であり、またそれと「朝鮮文学」との関係はどよのようなものであったのかは、次の崔載瑞のことばから知ることができる。

> 将来の日本文化を考える時に劃一的なものにしてしまうか。或はさうでなくて多くのつまり変化性のある文化を包容した或る統一原理によって、日本精神によって、それら多くの文化を統合して、それで日本の文化をやって行くか、結局文化政策的な問題にまで展開すると思うのですが[1]。

「国民文学」、すなわち「日本文学」とは、崔載瑞の言葉によれば、現存する形の民族文学としての日本文学ではなく、再出発する「朝鮮文学」やその他の東アジアの固有な文学をすべて包括するもので、それもまた再出発する「日本文学」であるという。その際、現存する日本文学は朝鮮文学と同じくひとつの地域を代表する地方文学に過ぎないがため、日本文学さえも包括する新たな「日本文学」が構想されなければならないというのだ。ここで「朝鮮文学」は「日本文学」、つまり「国民文学」の地方文学ではあるが、それ以前の地方文学とは性格の異なる「新地方」文学になる。これに対し、在朝日本人文人らは「短的に言いますと、特殊性とかローカルカラー、独自性とか言う言葉がありますが、日本文学の一翼としてでなしに、素直に言いますと朝鮮は朝鮮だけに閉篭るというか、朝鮮だけをもっと深く掘下げて行くという気分があったよう」[2](寺田瑛)だとか、「本日に於て朝鮮的なものを日本文学に特別に追加しようとする意識を強調する必要はないと私は思う。」[3](辛島驍)と話しながら日本文学の再出発を拒否し、「朝鮮文学」を民族文学と

1 座談会「朝鮮文壇の再出発を語る」(『国民文学』, 1941.11), p.82.
2 上掲書, p.78.
3 上掲書, p.79.

して日本文学の地方文学に編入させることを主張した。

「国民文学」や「日本文学」という同一の旗印を掲げ、その一環である「朝鮮文学」の共同の主体として自己を規定しているにもかかわらず、朝鮮文人と在朝日本文人はこのように同じ場で異なる夢を見ていたのだ。しかし、「朝鮮」や「朝鮮文学」と「日本」及び「日本文学」の関係に対し、朝鮮人文人と在朝日本人文人は類似した感情を共有してもいたが、それはその他の地方または地方、文学と「朝鮮」、もしくは「朝鮮文学」は異なるということであった。

> 国民的という点では、朝鮮の特殊な地位が九州や北海道とも違って、我々朝鮮に長年育って来た、という気持、これは国民意識ということから余計強くなるんじゃなくて、だから、関係ないというんじゃなくて、余計深いんじゃないかと思うのですがね[4]。（杉本長夫）

> 朝鮮文学を論ずる場合、それを九州文学や北海道文学に準える人が多い。勿論日本の地方文学として見ての話だろうが、その限りに於て間違っているとは云えない。然し両者は決して同列に列べられるべき性質のものではない。朝鮮文学は九州文学や東北文学や乃至は台湾文学等が持つ地方的特異性以上のものを持つ筈である。（崔載瑞）[5]

同じ日本、日本文学でありながら、「内地」、「内地文学」と自分たち、そして自分らの文学は異なるという共通意識は、前に挙げた二種類の文人らの思考の中に存在する質的な差が依然として問題となる、1940年代朝鮮における「国民文学」を支えてきた暗黙の土台の一つであったといえる。

これは在朝日本人においては、いわゆる「在朝日本人意識」として表れ、また「内地」日本人と朝鮮人をその時々他者として想定することで可能だった。朝鮮人とは異なる、それでありながら「内地」日本人とも異なるこうした「在朝日本人意識」は自ら生まれたものではなく、また「内地」から疎外されることで生まれたものでもなく、逆に「内地」から朝鮮への関心が集中したとき、「朝鮮」を代表する存在として自分を位置づけることで生まれたのである。そのため、もっと纏まった形の「在朝日本人意識」は「内鮮一体」や大陸兵站基地化などで朝鮮に対する関心が高まる1930年代末前後に形作られたといえる。

本稿は文学の場におけるこうした「在朝日本人意識」がいかに生まれ、またどのような姿を持っていたのかを考察したいと思う。京城帝大学生文芸をその標本として設定したのは、日本人と朝鮮人が共学していた京城帝大が、知と文学の側面で「内鮮一体」の場を先取りしていたという判断からである。

---

4 座談会「詩壇の根本問題」(『国民文学』, 1943.2), p.11.

5 崔載瑞『轉換期の朝鮮文学』(人文社, 1943), p.88.

2. 教養主義と植民地主義

『清涼』(1925~1941)は、京城帝国大学予科学友会の雑誌である。学友会[6]は、最近の学生会と似ているが、通常会員である学生の他に、教授を含む職員が特別会員になり、また卒業生も賛助会員になるなど、学校構成員がすべて所属している団体だった。会長は予科部長が担当し、各種役員、つまり副会長、理事、各部部長などを教授が受け持つなど教授の統制が強い組織だったといえる。しかし、その活動はある程度自由で、「学生の浩然の気を養うということで学校が学生を煽て上げ、学生の言動を大胆にした」[7]という。その中で、文芸部が編集を担当する『清涼』は、教授の文章が毎号に掲載されてはいたが、学生の文章が大部分を占める、学生の編集による学生の雑誌だった。文章の種類は研究論文、詩、小説、戯曲、翻訳、漢詩、短歌などの日本の古典詩歌などであった。

創刊当時、『清涼』の雰囲気を支配していたのは、当時京城帝大予科に台頭していた教養主義だったといえる。教養主義をいかに定義するのかについては見解が分かれるが、京城帝大予科を支配してた教養主義は、日本の旧制高等学校のそれ、つまり「哲学、歴史、文学など人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度」[8]と同じものだった。古典志向、西欧語志向、現実・実践との遊離などは、東アジアの教養主義の特徴と言えるが、これは『清涼』創刊号で顕著に見られる。

標語としてHolderlinの詩Hyperionの中、Menschenbeifall(人間たちの喝采)がドイツ語で掲載されたが、それを翻訳すると「ああ、大衆の望むものは雑踏なんかで使い道のあるもの/下人は権力者だけに憧れる/高貴な新生を信じる者は自ら神的な者ばかり」という意味である。2号では、フランスの哲学者Jean de la Bruyereの『性格論』からとった「人生が悲惨なら耐え忍ぶ。もし幸せなら失うことを恐れる。どうせ同じことだが」という警句を掲載している。哲学科3回卒業生である津田剛は、「当時の京城帝大は全教官が赴任前にそれぞれ三ヶ年のヨーロッパ留学を了えて着任されるということで、全学が未だヨーロッパ気分が抜けないまま講義されるというきわめて特異な状態にあった。世界の新しい傾向はそのまま生の形で講壇に持込まれ、おそらく日本の中で一番新しい学風につつまれた大学だった」[9]というが、西欧語と西欧文学、西欧哲学に対する志向は、京城帝大予科を他の朝鮮の高等教育機関、しいては朝鮮社会と区別させる指標であったといえる。予科英語教授の児玉如雪の英詩翻訳もこの延長線上にあるものだった。

日本人、そして『清涼』全体が古典、西欧志向を見せているのに対し、朝鮮人学生は全体的に同じ基調を維持しながらも朝鮮をその中に記入しようとした。特に兪鎭午は、1号で英詩翻訳とともに時調を翻訳紹介し、2号では自分の文芸論を披露する中、朝鮮の漢

---

6 「京城帝国大学予科学友会規則」(『京城帝国大学予科一覧』), 1924.

7 兪鎭午「片片夜話」(『東亜日報』, 1974.3.20).

8 竹内洋『教養主義の没落』(中公新書, 2003), p.40.

9 津田剛「有限と無限との間」(『哲学論叢』, 1972.1), p.4.；永島弘紀『戦時期朝鮮における新体制と京城帝国大学』(ゆまに書房, 2011), p.109 再引用.

詩を主張の根拠にあげるなどした。時調復興運動に代表される時調に対する再評価とその更新は、国民文学論などの形態で当時朝鮮文化界で主張されていたものだった。西欧古典と日本古典一色だった『清涼』に、兪鎭午は朝鮮古典を記入することで朝鮮社会に対する関心を促していたのだ。こうした朝鮮人学生の努力は学友会とは別途に文友会を組織し、『清涼』と別途に朝鮮語雑誌『文友』(1926~1929)を発刊するにいたった。『文友』の基本理念は次のように表現された。

> 一時も休むことなくつるはしを手にし、文明の故塚を掘り下げなければならない。それで祖先の骸骨になるであろう何になるであろう力強く掘るのだ。そうすると同時に「君のもの」を愛せよ。そしてまた「君のもの」の憂いを問え。それでこそ新なる問憂会員だ。問うの問、憂いの憂[10]。

柳基春は、「文友」の意味は「問憂」にあるということ、つまり朝鮮のもの、朝鮮の憂いを問うことにその意味があると主張しているが、これに対し『清涼』が表象する朝鮮は次のようなものだった。

> 半島より出現する学問と文化の新天地。(略) 處女地を拓く！ なんという勇しい語だ。(略) 明日は発つ！ 握るは鍬と杭。自ら道を拓き、後から生るるものの為に一本一本杭を打つ。半島の文華、此の處女地に第一の鍬を下す若人の旅立！[11]

「処女地」としての半島、ないし朝鮮において文化を花開くことに対する使命感を表すこの文章は、在朝日本人が持つ植民地朝鮮に対する基本的な態度を如実にあらわしている。朝鮮を自然や風景として消費し、事物化すること、朝鮮人や朝鮮人が生んだ文化さえ、真摯に対面すべき他者ではなく、開拓すべき対象として設定することがまさにそれである。ここで、在朝日本人意識とは荒涼とした自然を耕す開拓者としての自意識を意味するが、こうした点は、京城帝国大学同窓会誌『紺碧遥かに』をみると、日本の敗戦後も大きな変化がなかったといえる。

しかし1930年代に入り、多少の変化が垣間見られるようになるが、それは朝鮮関連の文章が増え始めるというところに兆候が見られる。京城帝大設立以後朝鮮関連研究が進むにつれ生まれた様々な研究論文や朝鮮各地の旅行記が主流をなしている中、「朝鮮新文學發達小史」(具滋均、1932.3)のように朝鮮の現実を知らせる文章や「KEIJO」(粕谷逸史、1932.3)のような表現主義風に京城の人々と風景を歌う詩も目につく。また、この中には文芸部員だった一色豪という多少例外的な在朝日本人の存在があった。

---

10 柳基春「文友」(『文友』, 1927.11), p.1.
11 「編集後記」(『清涼』, 1925.12), p.194.

3.『清涼』と一色豪

一色豪に関する情報はあまりない。四国の松山が故郷であり、1931年京城帝大予科の文科Ｂに入学、1933年本科文学科(国語国文学専攻)に進学、1937年卒業と同時に義州農業学校国語教師になり、1939年平壌第2中学に移る。前後には松山に戻り松山中学などの教師を務めたというのがこれまで彼に対して調査したすべてである。付け加えると一色は、1935年創刊され1939年まで続いた『城大文学』の同人であり、1~5号までの発刊人でもあった。また、同人の一人だった一瀬格は、1935年5月「楽浪」で開かれた発表懇談会で会議の冒頭挨拶兼雑誌創刊の機運についての話を一色にしたと記憶している。また、同じく同人だった田中正美は、後に朝鮮で作家として成長した宮崎清太郎を誘ったのも彼と自分だったと証言している。これにより一色が『城大文学』で占める位相が大体想像できるだろう。

一色豪の学生文芸活動は『城大文学』で始まったものではなく、『清涼』からだった。彼は、自分の予科在学時代に4巻発刊された『清涼』を編集する文芸部員だった。付け加えると『城大文学』は『清涼』で活動していた学生が本科に進学し作った雑誌である。

一色が『清涼』で一番最初に書いたのはコント「清酒「革命」」(1932.3)だった。背景は瀬戸内海に隣接した四国のある港で、主人公は清酒会社の社長である佃豊太郎だ。彼の会社で作った清酒の名は、漢字が好きな町長がつけてくれた「革命」だったが、彼は東京に留学している頭の切れる息子が社会主義運動に心酔してからは「赤いもの」を極めて嫌った。彼は、豊作のため米の価格が暴落し、暴落以前の高い米でつくった「革命」が売れず頭を悩ましていた。彼はそのため鬱憤で倒れ、東京から戻り漁民組合を組織した息子が指導する漁民蜂起の声が挽歌のように聞こえる中で息を引き取るが、彼の遺書には「わしの葬式に赤い袈裟着ることお断り」と書いてあった。「革命」ということばが乱舞する世態を風刺したものとも読めるこのコントは、その裏にブルジョア階級の自己矛盾に対する批判や社会主義に対する共感が含まれている。

その次の号(1932.9)には「文学に於けるリアリズムに就て」という評論を掲載したが、この文章は「如何にブルジョアリアリズムが其の歴史的制約性に依り越ゆべからざる限界を持ったか、更に何故に真の意味のリアリズムがプロレタリアリアリズムを措いてあり得ないかと云うことを明に」することをその目的としたものである。しかし、大体は社会主義リアリズム理論家の文章を並べることに過ぎず、唯物論的リアリズムに対する学習場という感じさえ与える。社会主義やリアリズムに対するこうした安易な認識にもかかわらず、注目されるのは、理論に対する関心が朝鮮現実に対する関心につながるという事実だ。それを見せてくれるのが一つの報告文学と一編の詩であった。

同号に掲載された「奬忠壇風景」は朝鮮人に対する観察をスケッチ風に記述したものだが、ここに登場する人物は伊藤博文をしのぶ博文寺の工事をやっている人夫たち、そして矢を射ながら悠悠自適としている有閑階級の人々と妓生たちである。什長と賃金を協商していた人夫たちの隣を兵士たちが通る。そのとき、人夫たちは「この兵隊達が満州

で中国人を何万人もぶっ殺したちゅうことだ」、「人殺しの人夫か」と否定的な認識をみせたり、「兵隊達は朝飯食って居るだろうか」という表現し難い憐憫に駆られたりする。こうした朝鮮人の人夫に対する観察は話者の次のような認識につながる。「ダダ…… 一帯の静けさの中にひびく機關銃の音、龍山から南山を越えて来るのだろう。それは飯前に癇持の子供がお膳をたたく様だ。人類の住む世界からあの音を追っ払えないものだろうか?」反戦または、嫌戦意識を媒介にした朝鮮の下層階級との連帯感をよくあらわしているといえるが、これに対し、矢場で遊女とのんびりと矢を射る朝鮮の有限階級に対しては批判的な視線を送った。結局「悠悠自適の地主貴族共、烈日の下に汗と石くずにまみれる人夫共. 二つ山が現代朝鮮の縮圖を描き出している」とし、朝鮮を階級的な視座で描き出したのである。

報告文学であるこの文章で注目すべきは、まさにこうした朝鮮の下層階級との連帯感とともに彼らを描きだすための言語使用だ。「家に行けばある(チビカモイッタ)」のように朝鮮人夫の会話に朝鮮語をルビ表示することがそれだ。一色が朝鮮語を駆使しえたかどうかは疑問だが、朝鮮語に近づこうとした意志は評価すべきことだといえよう。他に、この文章で注目されるのは次のような表現である。

> ドカンドガーン。その度に大きな岩がモクモク動く。
> 張赫宙氏の「餓鬼道」と云う小説の書出しには發破の音をゴトンゴトーンと形容していた。どうもそんな風には聞こえない[12]。

朴光賢は、在朝日本人文学に関して、張赫宙の受賞がそれに影響を与えたと論じたが[13]、その点をこの文章はよく示している。上の引用文では、日本語駆使の点についての競争心が浮き彫りにされているが、次の号(1933.3)に掲載された「離村」という詩は張赫宙との連帯感を露にしている。全文を引用すると次のようである。

> 崩れた土墻に蒲公英が咲いて
> 春浅い日は霜を融す
>
> 土に寝そべる俺の胸に
> ゆききする思いは何か
>
> 流離の人々の忘れ得ぬ面ざし
> 人々の今頃のくらしの有様
>
> 未だ下萠も見えぬ一年前
> 故土を見捨てた數戸の村人

12 一色豪「奨忠壇風景」(『清涼』, 1932.9), p.65.
13 朴光賢「朝鮮文人協会と'内地人半島作家'」(『現代小説研究』43, 2010), p.88.

瓢(バカチ)と襤褸をせなに負って
白衣の漂流者は別れを惜んだ

〝運(パルチャ)がよかったら又会おうよ〟
〝胡人奴達(ホーイン ノム)に注意せよ(チョシム・ヘラ)〟

これもついこの間のこと
三人の若者が他国え去った

蒼海(バタ)を渡らねば行けないと云う
XXとはいったいどんな所か

〝金が儲かったら送ります〟
〝倭人奴(ウェイン ノム)達に注意せよ(チョシム・ヘラ)〟

人は追われ故村は荒れ
崩れた土墻に春は甦るが

誰が彼等の土地をXった
誰が故郷の山河を追うのか

土に腹這う俺の胸に
こみ上げて来る千万の想い

春日にぬくむ俺の頬に
冷たく伝う無量の涙

ーこれは張赫宙氏の小説「追われる人々」に題材を得たものです。

『改造』(1932.10)に掲載された張赫宙の小説「追われる人々」は、朝鮮農民が中農から小作農に没落する悲惨な生活の末、小作料が払えず間島に追われる様を描いた作品だ。読者の「私」とテキストの相互作用、話者である「私」が感じる、朝鮮人農民の惨状に対する共感がよくあらわれたこの詩の注目すべき点は、張赫宙の小説の原文には倭人という字が「入人(ウェイン)」となっていることだ。南富鎮によると、これは検閲の痕跡である可能性が高いというが[14]、原文で見られる多くの伏字がそのような事実を裏付けている。しかし、一色はそうした一種の伏字を「倭人奴(ウェイン ノム))」という形で生かしているが、これは在朝日本人としての感覚によるものといえよう。しかし、問題は、自分はその倭人から離れた例外的な位置に属していると錯覚するところにある。しか

14 南富鎮・白川豊編『張赫宙日本語作品選』(勉誠出版, 2003), p.316.

し、逆にそうした第三の位置に安全に存在するという錯覚が植民地の下層階級に対する共感や連帯感を呼び起こしたというのも事実だ。その媒体は社会主義に対する共感だった。

4.『城大文学』と一色豪

『清涼』で活動していた文学青年が学部に進学し作った雑誌が『城大文学』(1935~1939)だった。この雑誌は現在2号(36.2)、3号(36.5)、4号(36.7)、5号(36.11)、7号(1939.7)が残っている。2号に同人の名が連ねられているが、これによると佐々木信虎，原達夫，田中正美，小野久繁，一色豪，渡部學，竹森正久，泉靖一，吳泳鎭，李石崑となっている。同人と文章を投稿した非同人の間に大差はなかったようである。つまり同人間の結束力はさほど強くはなかったようだが、それは同人たちが、それぞれ異なる記憶を持っていることからも推測できる。同一の文学観をもつとか、あるいは同じイデオロギーを持つようなことがなく、作品の傾向も多様だったことからも推測できる。ただ、同人たちの後の記憶で一致するところはまず以下のようなものだ。

> 唯言わず語らずに皆の気持の奥にあるのは、当時の京城の文学活動は、詩人達が主体なので、それに対比できるような小説面の强化、ということにあったと思います[15]。

小説中心の雑誌を作ること以外に明示的な同人意識は、朝鮮の現実に注目すること、在朝日本人意識を明らかにすることなどだ。それは次のような原稿募集広告から如実にあらわれている。

> 今後共に半島文藝の為に一臂の貢獻を到さんと精進を続ける考えである。我々は地方主義文學の自覺の下に、徒らに東京文壇に追從することなく、半島の文學ジャーナリズムの確立を目標として邁進せんとして居る[16]。

これは、朝鮮の現実に注目し、在朝日本人意識を表すことで半島日本人文学を立てようという抱負だといえる。また、「もっと社会を見つめた、またその社会の中で生きるわれわれ自身を見つめたもの、そこには何か日韓両民族の共通の地平があるかも知れないという漠然とした思念もまつわっていた」(『紺碧遥かに』，p.349)というが、その内実は満足に値するものではなかった。

たとえば、田中正美の「踊る」(36.2)は主人公多田が前の下宿主の後妻である初子をそ

15 京城帝国大学同窓会編，『紺碧遥かに』(耕文社，1974)，p.351.
16 「原稿募集」(『城大文学』，1936.11)，p.96.

の貧窮と無意味な日常から助け出そうとするが、理念に対する信念がないのとあいまって彼女に対するあいまいな態度や決断できない知識人のナイーブな姿を描いている。ここで在朝日本人下層民の日常の無意味さ、大井に代表される満州、台湾(洋服に書かれた文字だけだが)、朝鮮などの植民地を横断する日本人の生活などが生々しく描写されるが、それより圧倒的に在朝日本人下層民を見る主人公の二重的感情、つまり劣等感と優越感という知識人の自意識が浮き彫りになっているのである。こうした点は『城大文学』の文学青年が依然として日本「内地」文壇が注目すべき他者性の文学を生み出していないことを意味する。彼らの文学は背景こそ植民地であるが、東京文壇の文学と大差がなかったのだ。しかし、一色豪だけは他の同人と少し違っていた。

> 玄海灘一つで東京文壇のイザコザが余りじかに響いて来ない。刺激がないからゴシップ的文壇事情には暗くなる。流行の文學理論もはっきり飲み込めぬ内に消えてなくなって何時の間にか他の理論が唱えられ出すと云う始末である。
>
> つまり文学青年的敏捷さがなくなって田舎者になるのである。しかし反面に於て得なこともある。例えば末梢的な刺戟に煩わされずにゆっくり古典を相手に出来る。又朝鮮は民族的に錯雑したところであるからそう云う意味で半植民地的な特殊な人間生活を描き得る。
>
> 我々同人は大抵朝鮮と云う風土の上に成長した者達であるからそう云う意味で出稼人根性を離れてじっくり朝鮮を描けることが出来る。
>
> しかし何と云っても文壇的名聲には浴し度い。その為に大いに勉強して居る。芥川賞も下さると云えば何時でも取りに行きます[17]。

日本の中心ではなく地方だということから持つ劣等感、それとともに中央文壇に対する強烈な志向性を露にしながらも、同時に在朝日本人としての自意識を上の引用文は強く表出している。劣等感を短所から長所に切り替えるには、在朝日本人としての特殊性を生かす道しかなく、こうした在朝日本人意識は日本での朝鮮に対する関心から生まれる。在朝日本人意識は日本「内地」に対する対他的感情として生まれたものだが、それより一層根源的なところに「内地」から認めてもらいたいという欲求があるのだ。それはつまり、彼らが張赫宙のように日本語で創作する朝鮮人と競争関係にあることを意味する。日本文人らの朝鮮に対する関心を、在朝日本人に対する関心に切り替えようとした辛島驍の「内地人として」という文章がよく表している[18]。

在朝日本人意識を『城大文学』の中心においた一色豪は、そうした認めてもらいたいという欲望のゆえに、『清涼』でわずかながらも見せた朝鮮人との連帯感により成り立っている在朝日本人意識をそれ以上の境地で見せることができなかった。「雨期」(36.2)は「東京の進んだ文化的な運動や現象」に対する劣等感を持つ在朝日本人青年の目から見た、同じアパートに暮らす在朝日本人下層階級の生活を描いたものだ。「勇氣」(36.11)は

---

17 一色豪「編集後記」(『城大文学』, 1936.5), p.94.

18 朴光賢, 前掲論文参考.

朝鮮人女性を売春婦として利用し稼いだ植民地成金の娘との結婚過程を描いた小説である。「内地」では下人だった者が植民地で金稼ぎをしたという階級の逆転を描写しているこの小説においては植民地人は見られず、また語られない。

彼が描ける朝鮮人は依然として断片的にのみ存在するのである。「河畔の人々」(1936.5)は大学生岡田が脚気病を緩和させるため日光浴をしようと川岸にいったとき出会った朝鮮人に関する話だ。彼は、英雄が現れ「我々のXをXXさせる」兆候である対岸の現象が起こることだけを待つ道人風の老人、高等普通学校から思想事件で追われ川岸で働く柳という学生だ。岡田は「柳のことを想うと暗い気持にとざされた。そしてこれは柳ばかりではない。何百人もの若者が遊学出来ないで郷里に帰される。そして小作人と日傭人に轉落して行く。果ては満州などに漂泊して行かなければならなくなるのである」と共感を示すが、これは朝鮮人と在朝日本人の差異を肯定した上での共感ではないといえよう。

5. おわりに

本稿では一色豪を中心に在朝日本人文学の起源としての京城帝国大学学生文芸を論じた。京城帝国大学学生文芸は、はじめ当時のエリートが持った特徴のひとつである教養主義的な性向を示していたが、1930年代初頭には、『清涼』での一色豪の文章で解るように、社会主義を媒介に植民地人に対する連帯感と日本帝国主義に対する批判意識を露にした。その点は張赫宙の小説との相互テキスト性からよく窺える。しかしそれも自分自身をどの境界にも含まれない第三の地点に位置させることで可能だったと批判することができる。

『城大文学』ではこのような連帯感や批判意識はなくなり、在朝日本人意識という自意識だけが浮き彫りとなっている。この在朝日本人意識というのは植民地本国の日本人との差別意識からはもちろん、植民地朝鮮人との差別意識からも生じる。さらに具体的にいえば、植民地本国である日本で朝鮮に対する関心が高まるなかで、本国からの関心を得るために朝鮮人との差別性や連帯感という矛盾した感情と、本土の日本人との差別性や連帯感という矛盾した感情を適度に調節することで生じるのである。こうした点は在朝日本人文学の本格的展開といえる『国民文学』での日本人文学につながる。

本稿では在朝日本人意識とは、本国及び植民地朝鮮と自分自身を適切に分切することによって生成しうることを、一色豪の文章を中心として簡略でありながら分析した。この主張はテキストに対するさらなる精緻な分析と当時の言説空間との比較を通じてもっと豊かに解明できると思うが、それは次の課題として残しておく。特に、張赫宙の小説と一色豪の文章も含めて在朝日本人文学との相互テキスト性に対する解明は、今後の重要な課題だといえる。

参考文献

京城帝国大学同窓会編(1974)『紺碧遥かに』, 東京：耕文社.
京城帝国大学予科(1924)『京城帝国大学予科一覧』, ソウル：京城帝国大学.
竹内洋(2003)『教養主義の沽落』, 東京：中公新書.
崔載瑞外(1941) 座談会「朝鮮文壇の再出発を語る」(『国民文学』11月号, ソウル：人文社).
崔載瑞外(1943) 座談会「詩壇の根本問題」(『国民文学』2月号, ソウル：人文社).
崔載瑞(1943)『轉換期の朝鮮文学』, ソウル：人文社.
永島弘紀(2011)『戦時期朝鮮における新體制と京城帝国大学』, 東京：ゆまに書房.
南富鎭・白川豊編(2003)『張赫宙日本語作品選』, 東京：勉誠出版.
朴光賢(2010)「朝鮮文人協會と'內地人半島作家'」(『現代小說硏究』43).
柳基春(1927)「文友」(『文友』11月号).
兪鎭午(1974)「片片夜話」(『東亜日報』, ソウル：東亜日報社).

尹大石 Daeseok YUN

(韓国) ソウル大学国語教育学科、副教授。近代散文教育、韓国近代小説、京城帝国大学の教養主義など。『식민지 문학을 읽다』(서울：소명출판, 2012)、『키메라－만주국의 초상』(訳書, 서울：소명출판, 2009)、『한류백년의 일본어문학』(共著, 서울：인문서원, 2009)、「식민자와 식민지인의 세 가지 만남」(『우리말글』제57집, 2013)、「문학교육에서 바라본 일제강점의 기억과 체험：“친일문학”과 문학교육」(『문학교육학』34권, 2011)など。